

でも、事業が大きくなるにつれて源造は私を必要としなくなった。そして、新しく建てた家へ私を閉じ込めてしまったの。今の家では子供のて手もかからなくなっていたし、家事は女中がしてくれるので、私の仕事は何にもなくなってしまうたわ。源造は私を家に閉じ込めるだけでなく、働く楽しみまで取り上げてしまったのよ。

源造は相変わらず家にいないし、一人取り残されたようで寂しかったわ。でも、それは私を楽にさせてやろうという源造の思いやりだと分かっていたから我慢したの。いつか事業が一段落ついたとき、私たちは本当の夫婦としての暮らしができると信じていたのよ。

って家で食事をするなんて初めてのことだったのよ。口では早く元気になって下さいと言いながら、心の中ではこのままずっと源造が立ち直らずにいますように祈っていたの。

志津さんが源造の前に現れたのは、そのときだったのよね。私にはすぐ分かったわ。今までの女とは違う、源造は本気なんだって言うことが。

それまでにも何度か女性関係はあったの。家に閉じこもっていても、夫のことなら何でも分かる。これが妻というものなのね。でも、長くて一年続けばいい方で、しょっちゅう相手が代わっていたから心配はしなかった。

それが志津さんの場合は源造の目の色が

そんな状態が何年か続いて、源造が五十歳になった頃、突然源造が精神的に落ち込んだときがあったの。仕事上の悩みかそれとも健康上の悩みなのか、理由は何も言ってくれなかったけど、それはひどい落ち込みようで、顔の相も変わってしまったわ。仕事も手に付かなくて、いつも苛立っていた。

私は、それまで必死で働いてきた疲れが一気に出てきたのだと思っただわ。体はどこも悪くないのだから、家でのんびりしていればすぐによくなるからって源造を慰めていたの。

その頃が私にとって一番良かった時期だったわ。家にいることが多くなったし、家族四人そろ

違っていたわ。あんなに落ち込んでいた源造が急に生き生きして、それまで以上に仕事に熱中するようになった。再び家の中に私一人が取り残されたの。志津さんは私がようやくつかみかけた幸せを奪い取ってしまったんだわ。

しばらくして、源造が志津さんをあかつき荘に住ませたことを知った。その事実が私を決定的に打ちのめしたの。辛かったし、悔しかった。何日も眠れなくて、このまま死んでしまうんじゃないかと思っただわ。

源造がそうであるように私にとってもあかつき荘は思い出深い建物なの。息子たちが家を出ていったあとは、もう一度あかつき荘で暮らしたい

とおも と思つていたのよ。それほど大切に思つていた場所だつたのに、そこに愛人を住まわせるなんて。しかも、源造が足繁く通うなんて許せないことだわ。

わたし 私たちは、子供が二人生まれてから寝室が別だつたの。不規則な生活に付き合わなくていいようにと源造が言い出したことだつたけど、それ以来源造は私の体に一度も手を触れていないの。仕事に追われて体力も気力も使い果たしているからその気にならないのだと思つていたわ。でも、それも源造が私を女として見ていなかったという証拠よね。志津さんが現れてから初めて気がついたの。

それでも、私は源造に何も言わなかった。耐えることに慣れてしまった女は、その限界を越してもなお平気な顔でいられるものなのね。あと少しの我慢、あと少しの辛抱と自分自身に言い聞かせながら源造が私の元に帰ってくるのを待つていたの。

志津さんと別れてからの源造は確かに私のところへ帰ってきた。でも、もう遅かったのよ。夫婦としての時間をまったく持たなかった男と女に今さら何ができるといふの。向かい合っているのは男と女の抜けがらで、話す言葉もなく、ただ黙ってお迎えが来るまでの時間を潰しているだけだったのよ。

五十歳を過ぎた源造が志津さんをちやんと愛しているっていう事実が私を苦しめた。二人の愛の時間が妄想となつて私を追いかけてくるの。

私は何度も夜中にここへ来たわ。あかつき荘の前に立つて志津さんの部屋を見上げていた。雨の日もあつたし、木枯らしに身を震わせて立つていた夜もあつたわ。志津さんの部屋の明かりが消えてるのを見届けるまではその場を離れることができなかった。家に帰つてからもなかなか眠れなくて、朝がくるまで悔し涙を流し続けていたわ。

せめて源造が生きているうちにあかつき荘を処分していてくれたら、私も少しは慰められたかもしれない。でも、源造は志津さんがいる限りあかつき荘はそのまま残しておこうと思つてたのよ。私といっしょに暮らしていながら、源造は心の中で志津さんのことだけを考えていた。

私は源造にとつて、いったい何だったの。結局は、源造の子供を産んで育てるだけの道具でしかなかったのよ。悔しかったし、情けなかった。源造を恨み、志津さんと志津さんが今も住んでいるあかつき荘を憎みながら私はこの二十年を生きてきたの。その憎しみに支えられていたから源造より長生きできたのかもしれないわ。

あかつき荘がいつまでも残っていると、私はその悔しさや憎しみをいつまでも忘れることはできないと思うの。

残りの人生をその思いを引きずったまま生きていくなんて悲し過ぎる。これからは心静かに源造を弔っていきたいと思っっているから、そのためにもあかつき荘の建物を消してしまいたいよ。

志津さんに会って今までの憎しみをぶちまけてしまいたいと思っただけ、私最後まで堂々とした源造の妻でありたいの。だから志津さんには会わない。でも、あかつき荘を壊すことで志津さんにも私の思いは伝わるはず

吉祥寺の町にこの冬初めて雪が降った日、あかつき荘の取り壊しが正式に決まった。

若者目当てのスポーツセンターが吉祥寺に建設されることになり、用地を探していた業者にあかつき荘の土地を手放すと持ちかけたのが芙美だと聞いている。

住人たちは相場以上の立ち退き料を手にしてそれぞれ新しいマンションやアパートに越していった。

十一号室の三枝子と健二は必ず結婚式の写真を送るからといい残し、十三号室の上田洋子は挨拶にきて、この春から支店の店長に

だわね。

私の気持ち、栄子さんだけが知っておいてくれればそれでいい……。

芙美の長い告白を栄子は身動きもせず聞き入っていた。そして、聞き終わったとき、激しい疲労感に襲われていた。

「三月いっぱいまで待ちます。でも、住人たちにはできるだけ早く引越すようにと伝えておいてちょうだい。立ち退き料として十分な金額を用意しますから」
茫然としている栄子を残して、芙美は静かに部屋を出ていった。

任命されたと嬉しそうに話してくれた。

十六号室の内田夫婦も正式の夫婦になれることが決まり、晴れ晴れとした表情で荷物を運び出していた。

そして、矢島志津も思っただけ早く引越し先を決めた。

「矢島さん、今度はすぐくりつばなマンションですってね。やっぱり矢島さんにはその方が似合いますよ」

「でも、家具をすべて新しいのにしなくてはならないから大変なのよ」
引越しの準備をする志津の表情は明るかった。

「その調子で、早くいい男性を見つけて幸せになつて下さいね」

「ありがとう。栄子さんも新しく出直すのだから頑張つてね」

互いに強くなずきながら別れを告げた。

最後の住人を見送つて、栄子たち親子もあか

つき荘を去る日がきた。

迷つたあげく芙美の誘いを断つて、当分実家

に身を寄せることに決めた。母の作つた不揃いの

野菜や、子供の頃に遊んだ野山が無性に懐かしか

つた。しばらくはその中に身を置いて、これから

のことをじっくり考えるつもりである。

荷物を送り出した後、栄子は玄関をきれいに

掃き清めて管理人としての最後の仕事を終えた。

了

(以上1月6日放送分)